

明倫小学校の旧校舎を活用する京都芸術センターは、その独特の環境の特性を活かし舞台表現を志す者をさまざまな形で応援しているが、今年の K A C Performing Arts Program では、3組のアーティストたちに、カゲヤマ气象台の戯曲3部作『シティⅠ』『シティⅡ』『シティⅢ』をパフォーマンスとして請け負わせるという企画を実現させた。

『シティⅠ』『シティⅡ』『シティⅢ』は都市をテーマとした3部作の戯曲であり、過去・現在・未来をモチーフに描かれたという。いずれの作品にも、文明が滅んだあとの明るく乾いた虚無と悲しみが広がり、メランコリックな終末思想に充たされた世界観が通底しているが、一方で、登場人物はばらばらで、ストーリーもつながっておらず、3作間に直接的な関連性はない。同色の世界を描きながら表出法と言葉の量は三様である。

舞台は2019年1月25日から27日の3日間、毎日各チーム1回ずつ順番を入れ替えつつ上演された。『シティⅠ』は、20代から30代の若手芸術家ゆざわさな、川瀬亜衣、渡辺美帆子らが演出をしており、京都の街歩きでの体験をもとに作品を立ち上げた。『シティⅡ』は土地を知る遊び「フィールドプレイ」を展開するパフォーマンス集団 hyslom が初めて戯曲の作品化に挑んだ。『シティⅢ』は昨年、愛知県芸術劇場が主催する第17回AAF戯曲大賞を受賞した作品で、その受賞記念公演で演出をした振子びじんが、2度目の演出と振付を担当した。

3組のアーティストたちが創りあげた舞台は個性豊かであった。例えば、『シティⅠ』では、開演直後の薄暗がりのなか、蚊帳か漁網のような網が床一面に広がり、中に絡め取られ物体のように離れて横たわる2人がいるが、それは死者のようにも未生の闇に眠る胎児のようにも見え、全体のトーンとなる喪失感がすでに色濃く漂い印象深かった。『シティⅢ』では、振子びじん演じる「爆弾屋さいとう」が白目を剥いて「あっ不吉だ。不吉だ。不吉だ……」とつぶやく奇妙な独白の台詞から、役者たちが、都市風景が描かれた大きな書き割りを引き剥がして来て、よじ登ったり倒したりしていたぶり続ける終盤に到るまで不思議な違和の味わいに充ちていた。この2作品の細部を語りたいたい思いも残るが、筆者は、hyslom の『シティⅡ』に衝撃を受けたため、本稿では以後『シティⅡ』に偏って書くことを許されたい。

『シティⅡ』の戯曲では5つの役柄が設定されている。人物としてはA・B・Cの3名の登場が指定され、その他に「人」とは指定されていない【根源】と【下等生物】という役柄がある。物語という物語は無く、A・B・Cが歌のメロディを思い出そうとする内に、旅に出て、海にたどり着くという大筋のかたわら【根源】や【下等生物】の死が描かれる。A・B・Cの台詞は、英語であるが、日本語、文学作品や歌からの引用が混ざり、詩のようである。このような戯曲を、hyslom は実

に実直に立ち上げた。

舞台を観に来ていて「これを見たかったんだ。これに逢いに来ていたんだ」と感じることがある。至福の瞬間である。hyslom の『シティⅡ』ではまさにそれを味わった。芝居の冒頭、体育館の足下の通風口から 2 人の人物が這いながら侵入してくる。最初の男は手に鉋を持ち、鎌首のように首をもたげ、前方を見据えつつ、匍匐前進してくる。襲われるのではないかという恐怖を客に充分与えた後、彼は座りこんで、積みあげられている土嚢の 1 袋を鉋の刃でかき裂く。細かな土埃が立って、香ばしい匂いが客席まで伝わる。粘土質の土がこぼれ出る。彼はそれを泥団子のように丸める。真正面を向いたまま尋常の量ではない唾液をだらだら垂らし、その粘りで丸めようとする。次にそれを舐める。囓る。土色に染まった舌を見せながら彼はしゃべり出す。なぜか英語である。

あいむ、くれないじい！ あいむ、くれないじい！ しんすあいわずあぼーい！
(以下、引用部分はカゲヤマ气象台の戯曲から抜粋)

私はここで先述の幸福感を味わった。これほど「くれないじい」を体現した寵児のような演者を観るのは久しぶりだぞと。異形の彼はひたすら「自分がクレージーである」と語り続けている。青年の肢体を持ちつつ野生の子どものようにふるまうこの人物を、彼が自称する通り理解すればよいのか、ここは一体どこで、何が起ころうとしているのか、よくわからないまま舞台が進んでゆく。

2 番目に侵入してきた安っぽい鬘をかぶった青年は、女性のつもりなのか「あいむあすちゅーぴどがーる！」と踊り狂っては転倒する行為をくり返している。彼もたどたどしい英語を話す。あらかじめ舞台にいた 1 人も加わって、3 人は、土嚢を投げあったり、釜の縁に登って、たたえられた水の底に沈むパンをひきあげようとして落ちてずぶ濡れになったり、石炭ストーブの中から澳をとりだして火遊びをしたり、狼藉の限りを尽くす。口に含んだアルコールを澳火にふきかけ激しい火柱を立たせたり、炎を口に含んで消したり、日本の見世物芸として演じられてきた火吹きまでやり始める。観客が見世物小屋にいるかのような錯覚にとらわれたところ、突然、端正な日本語が聞こえてくる。

だめでせう とまりませんな がぶがぶ湧いてあるんですからな

宮沢賢治の「疾中詩編」の中の「眼にて云ふ」の一節である。賢治絶命間際の、死を凝視して壮絶でありつつも清澄な詩である。土と水と火と野生児 3 人が横行する荒くれた現場と、飛びかう変な英語に客の眼と耳が慣れ出したころ、唐突に発せられた哀しく美しい日本語。誰がこの言葉を発したのか？「すちゅーぴどがーる」である。しかしこれを口にしてている彼は自身何を言っているのか理解していない。仲間に尋ねられてもわからない。間もなく彼は恐ろしい事実を、例のたどたどしい英語で語り出す。

うえないわず、せぶんていーんいやーずおーると、あばうと、てんいやーずあごー。ざっとてりぶるしんぐはっぷんど、しんすぜん、あいすぴーくいんぐりっしゅ、びふおーざっと、あいすぽーくじゃばにーず……

およそ 10 年前の彼がまだ 17 歳のころ、日本に未曾有の大惨事が起き、彼が文明も母語も記憶も全てを失ったらしいということを観客は了解する。いやでも我々は 2011 年の 3, 11 の津波と原発事故を連想せざるを得ない。「すちゅーびどがーる」にとっては過去に起き、我々にとっては未来に起こるかもしれない「てりぶるしんぐ」が自ずから想像され、この舞台が未来の日本であることをようやく理解する。そして愕然とした絶望に満たされる。やはり日本はだめだったのか……と。「だめだせう とまりませんな がぶがぶ湧いてあるんですからな」は、結核で亡くなった賢治臨終間際の言葉でありながら、過去ヒロシマやナガサキにおいて放射能禍で苦しみながら亡くなった無数の人々の言葉と重なる。

「すちゅーびどがーる」が再び賢治の詩を口にする。不審がる仲間に関自分の知識の源となった古い小さなテープレコーダーを出して来て見せ、スイッチを押す。と、今度は低いか細い女の声で同じ詩の朗読が流れ始める。いつの間にか、テープレコーダーを囲んで、2 人は背中を丸めて膝を抱えて座りこみ、残る 1 人は横たわって虚空を見上げたまま、自分らは理解できない言語のしらべに耳を傾けている。静謐な空間である。死に絶えた過去の人々からのメッセージが続く。

ゆふべからねむらず血も出つづけなもんですから そこらは青くしんしんとして どうも間もなく死にさうです けれどもなんといい風でせう もう清明が近いのであんなに青ぞらからもりあがって湧くやうに きれいな風が来るですな。(中略) あなたの方からみたらあぶんさんたんたるけしきでせうが わたくしから見えるのは やっぱりきれいな青ぞらと すきとほった風ばかりです

このように切なくも愛しい情景を、私は長い間、舞台上で目にしなかった。よるべない世界の孤児、3 人の青年のうずくまる裸体は、我々人類の未来を象徴し、暴走する現代の文明を沈黙の内に告発していた。『シティⅡ』で、最も心に残る、一生忘れられそうにない美しい場面である。

上演後戯曲を読んで理解したが、hyslom は『シティⅡ』を創るにあたって、丁寧に、健気なまでに原作に忠実であろうとしていた。彼らはパフォーマンスで火を扱うとき慎重である。その眼差しや手つきには火に対する畏敬の念すら籠もっている。そうでなければ危険を伴う行為を長く続けて来られていない。全力で対象に誠実に向き合うことが彼らのポリシーだから、同じ精神で、初めての戯曲に真摯に向き合ったのか。『シティⅠ』と『シティⅢ』の上演において、私には、しばしば、ダンサーが、戯曲の言葉を背負うがゆえに、発語する体と舞踊する体の狭間で揺らぎ苦しんでいるように見えた。しかし hyslom の 3 人にはそれを感じなかった。なぜなのか。『シティⅡ』は難しい戯曲である。短く抽象的だし、日本語を忘れた少年た

ちが英語を話せたり、忘れたはずの日本語が混ざったり、真面目な観客が苛立つような矛盾が随所で起きる。しかし辻褄の合わなさはずべて作者のしたたかな計算である。作者は明らかに日本語と道理を拒否している。この母国語と予定調和への近親憎悪が戯曲全体にほとばしるような勢いと荒々しさを付け、hyslom3人の巧まぬ奔放な個性との僥倖の出会いを果たしたのではなかったか。自らの体臭に最も近い戯曲をひきあて、パフォーマンスを組みこみつつ舞台化し得たのが hyslom の今回の一番の功績なのだろう。

もっとも、hyslom の『シティⅡ』が一般的な意味で上出来であったかと尋ねられれば微妙ではある。特に戯曲を読んだ後には安易な演出であったのではないかとされる箇所にも思い当たった。例えば、戯曲の【根源】を「通訳の人物」に【下等生物】を「氷塊」に置き換えた点である。「通訳の人物」は英語の台詞を日本語に通訳をするが、彼が「根源」という言葉が持つ深みを表現し得ていだろうか。また、【下等生物】を氷塊に置き換えている箇所も、「生物」の比喩であると仮に捉えたとしても、氷塊を「下等」とする必然性が感じられなかった。また最後の場面は物足りなく感じた。通訳が胸の中で風船を破裂させ、小さなくす玉を頭上で割るという終わり方が小規模で、観る側を不完全燃焼に陥らせた。戯曲で言えば、「【根源】、膨らむ。【根源】、爆発する。真っ白な羽が空から舞い落ちる。三人はパンを食べ続ける。」のシーンである。もし、再演があるのだとすれば、ぜひ違う仕掛けを観たいものである。

公演最終日、最後の上演が終わり 1 時間ほどしてから外に出ると、hyslom の 3 人がトラックを寄せて装置の積み出しをしていた。亀岡から運んできた赤く錆びた 1 斗の水を溜めるという大釜も乗っていた。「よるべない世界の孤児、3 人の裸体の青年」はセーターに身を包んで、すっかり現代の青年に戻っていた。話しかけなくなっていたがやめて、京都の夜の瑞々しい空気を吸いながら帰路についた。彼らは次どんなパフォーマンスを見せてくれるのだろうか。また芝居に挑戦するのだろうかなどと考えつつ。

破天荒、屈託のなさはとびきりで若者三人釜担ぎゆく

了 (2019 年 2 月 12 日改訂版)